

永遠の命—誰が享受しますか 1

永遠の命を得ることはクリスチャンになることに依存しない

いきなり、センセーショナルというか、前代未聞のサブタイトルになってしまいましたが、このテーマは、キリスト教として知られる信仰の基本中の基本とも言うべきもので、ある牧師の言葉を借りれば、「キリスト教（新約聖書）は「永遠の命」の宗教です。キリスト教の救いとは「永遠の命」を得ることです。キリスト教における信仰者の究極的目的は「永遠の命」です。」と表現されるくらいで、これを外したら、キリスト教は成り立たないと言われています。

しかし、(様々な宗派があるにせよ) ほとんどのキリスト教会の教えは、基本的に靈魂不滅説を採用しており、「永遠の命を得る」イコール「死んだら天国に行く」ことであり、そこは安住の地で(いや、安住の天で)であり、なぜ、どんな目的のために神はその人を天国に召されるのか、そこでどんな仕事(働き)をするのかについては、無関心なのか、不思議なほど、ほとんど何も語られないのが現状です。

しかし、聖書が述べる天の神の国は、目的を持った機能体* (欄外の脚注をご覧ください) であり、それは、最初の人間に罪が入ったのをすべて解決するための手段であり、具体的には、アブラハムとの契約によって明らかにされた、人類救済の取り決めに関わるものです。

(創世記 22:18) 「あなたの胤によって地のすべての国の民は必ず自らを祝福するであろう」

これは、神からの祝福が、「あなたの胤」を通して「全ての国の民」に及ぶという約束です。つまりアブラハムの胤は祝福の経路となるということです。

そして、その胤の主要な方がキリストであり、神に召されて天国に入る人はその約束の胤として呼ばれるのであり、天国において果たすべき責任があり、仕事があるのです。

決してのんびりと未来永劫に余生を過ごすためではありません。

「キリストに属しているのであれば、あなた方はまさにアブラハムの胤であり、約束に関連した相続人です。」(ガラテア 3:29)

そして、キリストが弟子たちに度々繰り返されているように、彼らは「天で、王として支配する」というのが、彼らの役職です。そして「地のすべての国の民」を治めることになります。

そうです、天国に召されるとは、言わば、地上からの「支配者募集」にあずかることなのです。

もうこの点だけでも、「クリスチャンになれば、死んでから地獄ではなく天国に行ける」と教わってきた人々は、???? ! ? でしょう。

ですから、「永遠の命を得ることはクリスチャンになることに依存しない」というサブタイトルは、これまでのキリスト教神学からはことごとくかけ離れた、もしくは甚だしく逸脱した論議と受け止められる事でしょう。

しかし聖書を注意深く読めば、誰でも確認できることです。

*機能体：ここに引用しているのは「機能体」という語の一般的な説明です。

「組織には「共同体」と「機能体」があり、本来この二つは機能も目的も違う。従って、この区別を明確に意識している必要がある。共同体は家族、地域社会や趣味の会など。これに対し、機能体は外的な目的を達成するための組織であり、ここでは組織内部の構成員の満足や親交は手段であり、本来の目的はプロジェクト完成などの組織外の目的を達成することにある」

さて、やっと本題ですが、まず、「永遠の命」に関する次の聖句を考慮しましょう。

(マタイ 19:16 - 24) 師よ、永遠の命を得るために、わたしはどんな善いことを行なわなければならないでしょうか。イエスは彼に言われた「命に入りたいと思うならば、おきてを絶えず守り行ないなさい」。・・・「あなたは殺人、姦淫、盗み、偽りの証しをしてはならない、父母を敬いなさい、隣人を自分自身のように愛さねばならない」。

青年は言った、「それらをみな守ってきました。まだ何が足りないのですか」。イエスは言われた、「完全でありたいと思うなら、自分の持ち物を売り、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、天に宝を持つようになるでしょう。それから、来て、わたしの追隨者になりなさい」。このことばを聞くと、青年は悲嘆して去って行った。イエスはこう言われた。「富んだ人が天の王国に入るのは難しいことでしょう。富んだ人が神の王国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易いのです」。(一部語句割愛)

ルカの方の記述ではこうなっています

ルカ 10:25 - 28) 「師よ、何をすれば、わたしは永遠の命を受け継げるでしょうか」。イエスは彼に言われた、「律法には何と書いてありますか。彼は答えて言った、『あなたは、心をこめ、魂をこめ、力をこめ、思いをこめてあなたの神エホバを愛さねばならない』、そして、『あなたの隣人を自分自身のように[愛さねばならない]』」。イエスは彼に言われた、「あなたは正しく答えました。このことを行ないつづけなさい。そうすれば命を得ます」。

このことから分かるのは、「永遠の命を得るため」の条件は「おきて(殺人、姦淫、盗み、偽証をせず、父母を敬い、隣人を愛する、など)を絶えず守り行う」。ことであり、そうすれば「(永遠の「命に入る」とイエスは述べておられます。

そして付け加えて、「完全でありたいなら」持ち物を後にしてキリストの「追隨者」になるよう勧めましたが、青年は悲嘆して去ります。「追隨者になる」機会を逸しましたが、それによって、すでに保証した「永遠の命を得る」ということが無効にされたことを示すものはどこにもありません。

それに対するイエスの言葉は、富んだ人が「永遠の命を得られない」と述べたのではなく、「天の王国に入る」「神の王国に入る」事の困難さを示しておられます。ですから、「永遠の命に入る」条件とは別の「神の王国に入る」ための条件を示して「追隨者になる」よう励ましていることが分かります。それがこの時代の、人々に対する(特にユダヤ人に対する)神のご意志だったからです。

これらの出来事を見ていた弟子たちは、次のように尋ねます。

(マタイ 19:27 - 29) 「わたしたちはすべてのものを後にして、あなたに従ってまいりました。実際のところ、わたしたちのためには何があるのでしょうか」。

イエスは彼らに言われた、「あなた方に真実に言いますが、人の子が自分の栄光の座に座るときには、わたしに従ってきたあなた方自身も十二の座に座り、イスラエルの十二の部族を裁くでしょう。そして、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、あるいは地所を後にした者は皆、その幾倍も受け、また永遠の命を受け継ぐでしょう。」

弟子たちは、先の金持ちの青年と違い、「全てを捨ててキリストに従ってきた」者ですから、彼ら

(追隨者) に対する報いとして「12の座」に着き、イスラエルの12部族を裁く事(王国の王としての立場)が約束されます。

そして付け加えて、「そして、わたしの名のために・・・を後にした者は皆」

「・・・は皆」と述べていますので、ここからはすでに弟子たちに対する直接の言葉ではなく、いわゆる一般論というか、原則を語っておられます。従って、この後のことばは、必ずしも追隨者になった人に関するものではなく、「キリストの名のために」財産、家族などを後にする人が何を享受することになるかを述べているものです。

そしてその報いが「永遠の命」であると約束されています。

平行記述のルカの方では、その後半の記述はこうなっています。

(ルカ 18:30)「来たらんとする事物の体制で永遠の命を得ない者はいません」。

「来たらんとする事物の体制で」(「後の世では永遠の命を受ける。)(新共同訳)となっています。天の王国は「来るべき事物の体制」とか「後の世」と表現されることはありません。「神の王国」は古い新しいに関係なくそもそも「世」ではないからです。

「来るべき新しい世」で受ける「永遠の命」という表現は「天の王国で受ける」というより、千年王国の地上の生活者としての報いとして与えられると考えられます。

もちろん、王国を受け継ぐ人も「永遠の命」を得ますが、キリストの名のために「財産、家族などを後にする人は皆、(そういう人は全員)イスラエルの12部族を裁くようになる、あるいは、天に召される人々に関連した表現は見えません。なぜなら、それらの人の特色には「キリストに従う(追隨者になる)」という項目が含まれていないからです。

もう一つ、ヨハネの記録から、同様と思える聖句は次の言葉です。

(ヨハネ 12:25-26)「この世において自分の魂を憎む者は、それを永遠の命のために保護することになります。だれでもわたしに仕えようとするなら、その人はわたしの後に従いなさい。そうすれば、わたしのいる所、そこに、わたしに仕える者もいることになります。」

この句も同様で、自分の魂を憎む、つまりキリストの故の何らかの自己犠牲が「永遠の命」を得させることとなりますが、さらに積極的に踏み込んで、キリストに仕え、後に従う(追隨者になる)人はキリストのいるところ、つまり天の王国に入る。と述べられ、やはり双方にはそれぞれ別の条件の違いがあることが読み取れます。

さらに聖書中の「永遠の命」について言及している聖句をずっと拾い上げて読んでゆくと次の事柄が分かってきます。

基本的に「全ての人」、「あらゆる肉なる者」に対して差しのべられている神の祝福が「永遠の命」であり、その中の、キリストを認める(贖いに信仰を働かせる)ようになる人、キリストの故に自己犠牲を払う人々にその「永遠の命」は確かなものになるという約束であり、一方、追隨者となる(バプテスマを受けクリスチャンとなる)人々には「天での王国」が約束されていると見ることができます。

冒頭で述べたように、全ての人類に対する神の祝福は、本来なら全ての人間が享受していたはずの「死ぬことのない命」を回復することであり、その目的を成就するための備えが、「アブラハム

の胤」なのですから、「全ての国の民」がその祝福を受けるという約束の故に「永遠の命」の約束があるというのは、旧約を含め聖書全巻の内容からして当然のことと言えます。

というわけで、「永遠の命」という表現は、限定された（選ばれた）人々に対してというより、全ての人間に対するものとして約束されていると思える聖句を次に列挙してみることにします。

(ヨハネ 3:16 - 19) 「神は世を深く愛してご自分の独り子を与え、だれでも彼に信仰を働かせる者が滅ぼされないうで、永遠の命を持てるようにされたからです。神はご自分の子を世に遣わされましたが、それは、彼が世を裁くためではなく、世が彼を通して救われるためなのです。彼に信仰を働かせる者は裁かれません。信仰を働かせない者はすでに裁かれています。その人は、神の独り子の名に信仰を働かせていないからです。」

(ヨハネ 3:36) 「み子に信仰を働かせる者は永遠の命を持っている。み子に従わない者は命を見ず、神の憤りがその上にとどまっているのである。」

(ヨハネ 4:13 - 14) 「イエスは答えて彼女（サマリアの女）に言われた、「この水を飲む人はみな再び渇きます。だれでもわたしが与える水を飲む人は、決して渇くことがなく、わたしが与える水は、その人の中で、永遠の命を与えるためにわき上がる水の泉となるのです。」

(ヨハネ 5:23 - 24) 「子を尊ばない者は、それを遣わされた父を尊んでいません。きわめて真実にあなた方に言いますが、わたしの言葉を聞いてわたしを遣わした方を信じる者は永遠の命を持ち、その者は裁きに至らず、死から命へ移ったのです。」

(ヨハネ 5:39) 「あなた方は聖書によって永遠の命を持てるようになると考えて、それを調べています。そして、これこそわたしについて証しするものなのです。」

(ヨハネ 12:50) 「わたしは、[父]のおきてが永遠の命を意味していることを知っています」

(ヨハネ 17:1 - 3) 「父よ、時は来しました。あなたの子の栄光を表わしてください。子があなたの栄光を表わすためです。それは、あなたがすべての肉なるものに対する権威を子に与え、そのお与えになった者すべてについて、子がそれらの者に永遠の命を与えるようにされたことに応じてです。彼らが、唯一まことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストについての知識を取り入れること、これが永遠の命を意味しています」

(ローマ 6:23) 「罪の報いは死ですが、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命だからです。」

(ガラテア 6:8) 「自分の肉のためにまいている者は自分の肉から腐敗を刈り取り、霊のためにまいている者は霊から永遠の命を刈り取ることになるからです」

(テモテ第一 1:15 - 16) 「キリスト・イエスが罪人を救うために世に来られたとは、信ずべく、また全く受け入れるべきことばです。わたしはそうした罪人の最たる者です。それなのにわたしが憐れみを示されたのは、わたしの場合を最たる例としてキリスト・イエスとその辛抱強さの限りを示し、永遠の命を求めて彼に信仰を置こうとしている人たちへの見本とするためだったのです。」

(テトス 1:2 - 3) その敬虔な専心は永遠の命の希望に基づいています。その希望は、偽ることのできない神が、久しく続いた時代の前に約束されたものですが、神はご自身の定めの際に、宣べ伝える業によってみ言葉を明らかにされました。」

(ヨハネ第一 2:24 - 25) 「初めから聞いている事柄があなた方のうちにとどまっているなら、あなた方もまた引き続きみ子と結ばれ、また父と結ばれていることとなります。さらに、永遠の命、これが、ご自身がわたしたちに約束して下さったその約束のものなのです。」

(ヨハネ第一 5:13) 「わたしがこれらのことをあなた方に書くのは、神のみ子の名に信仰を置くあなたが永遠の命を持っていることを知らせるためです。」

いかがでしょうか。もちろん「追随者であるクリスチャン」も全ての国の民の1人ですし、永遠に生きる人を治めるわけですから、彼らに「永遠の命」に関する記述が当てはまるのは当然です。

しかし、こうして多くの聖句を読んでゆきますと、これらの記述に「永遠の命」が、キリストの追随者になる人だけのものだと言うことを示す記述はまったくありません。

実際に読んで見ると、それは以外に思える程です。

それで、「キリストを認める、信仰を置く」という表現は「クリスチャンになる」という意味、あるいは条件とは同一ではなく、基本的にキリストが神の子で、その贖いを信じて受け入れる人は、王国の支配を受ける側として、その義を保ち続ける事によって「永遠に続く命」を享受することになる。と考えられます。

この点については、この後の記事で扱うことにします。